

# JCSSA

## NEWS



### サマ<sup>ー</sup>セミナー

# プロ<sup>ジ</sup>エ<sup>ク</sup>トXに<sup>学</sup>ぶ

- 会長の声 2
  - ・ 業界が一丸となって
- 特集 3
  - ・ プロジェクトXに学ぶ
- 人材育成 6
  - ・ 新入社員セミナー
- トレンドスコープ 8
  - ・ 金融商品取引法と  
これからの企業活動
  - ・ ドキュメントと業務システムの  
連携で加速する業務革新
- レポート 10
  - ・ 交流促進委員会
  - ・ ソフトウェア流通調査委員会
- 新会員のご紹介 12
- 事務局だより 16



社団法人  
日本コンピュータシステム販売店協会  
大塚 裕司 会長

## 会長の声



JCSSAサマーセミナーの開催日前日、2007年1～3月期の国内総生産(GDP)が上方修正したというニュースが入りました。私の実感としても、3～5月の景気動向は緩やかではありますが、確実に回復に向かっていく印象を受けています。世間の動きに目を向けますと、今年1月、個人消費者向けにWindows Vistaが発売されました。一方、企業においては新会社法、J-SOX法に対するニーズが日々高まってきています。また、個人・法人の両方を対象に回線コストの見直しも行われるなど、何かと変化の激しい業界に我々は身を置いているのではないのでしょうか。

私の経営する大塚商会のお客様は約70万社。うち8割は中小企業です。ですから、中小企業の動きを間近で見ているわけですが、いずれの企業からも「ITを上手に活用して会社を強くしよう」という思いを感じます。世代交代が進む中、次の飛躍に向けてITを積極的に活用していこうと、皆さんが思っているようです。

「激しい変化の流れ」「IT活用への前向きな姿勢」。こうした状況に、我々販売店はいかに対応していくべきでしょうか。最新の技術をお客様に提供すること、生産性向上とコスト削減のお役に立つこと。それによりお客様に心から喜んでいただくこと。それこそが、販売店の存在意義だと思います。先ほどの理事会で、創業まもない会社を対象に、当協会の会費の見直しを行いました。メーカーや国からの情報が届きにくい、資格を取得したいが情報が少ない……。このような環境に置かれている皆様に対して入会のハードルを少しでも低くし、当協会を最大限に活用していただきたいと考えたからです。

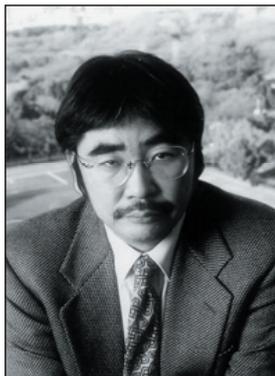
これからも日々移り変わる変化にプロとしてしっかりと対応し、業界が一丸となってお客様に喜んでいただける仕事をしていけたらと思っています。そうした我々の活動が、日本経済の活性化、国力のアップにつながれば、これ以上の喜びはありません。梅崎前会長より任を引き継いでちょうど1年。まだ不馴れなところもございますが、皆様、どうぞよろしくお願いたします。



特集 サマーセミナー

# プロジェクトXに学ぶ

## ～成功するプロジェクト、リーダーの条件～



日本放送協会(NHK)  
エグゼクティブプロデューサー  
今井 彰氏

2000～2005年にかけて放映された、NHK総合テレビ「プロジェクトX～挑戦者たち～」。全国で感動を呼び社会現象にまでなった当番組は、戦後日本において革新的な事業を成し遂げた「無名の日本人」にスポットライトを当てた作品である。JCSSAでは2007年6月12日にサマーセミナーを開催し、番組のチーフプロデューサー・今井彰氏をお招きした。今井氏が番組を通して伝えようとしたメッセージとは何だったのか。番組に込めた思いやプロジェクト成功の秘策、リーダーの条件について語っていただいた。

### 今井 彰氏プロフィール

1956年 大分県佐伯市生まれ。1980年 NHK入局  
NHK教養番組部ディレクターを経て、2000年3月～「プロジェクトX～挑戦者たち～」のチーフプロデューサーを務める。  
現在、NHK制作局 エグゼクティブプロデューサー

#### ■受賞歴など

- ・1991年度NHKスペシャル「タイス少佐の証言～湾岸戦争45日間の記録～」で文化庁芸術作品賞を受賞
- ・1994年度NHKスペシャル「埋もれたエイズ報告」で日本ジャーナリズム会議本賞、放送文化基金奨励賞を受賞
- ・1998年度「シリーズ弁護士・中坊公平」で、ギャラクシー優秀賞を受賞
- ・2001年には、文藝春秋より「21世紀のリーダー 100人」に選ばれる
- ・「プロジェクトX～挑戦者たち～」は、2001年度第49回菊地寛賞、第9回橋田賞、放送文化基金グループ部門賞、ATP特別賞などを受賞。

※「タイス少佐の証言」「タイス夫妻の戦争」の連作は、戦争と個人、家族の絆を描き、大きな反響を得た。また、「埋もれたエイズ報告」は、血液製剤をめぐるエイズ感染の実態を徹底した調査報告により解明し、国会や裁判をも動かす現象となった。その後も「史上最大の不良債権回収」「アジアの従軍慰安婦」「オウムが来た町」などを制作し、社会派ドキュメンタリーの旗手と呼ばれる。

#### ■著書

「プロジェクトX リーダーたちの言葉」「プロジェクトX 新・リーダーたちの言葉 ゼロからの大逆転」「プロジェクトX ザ・マン—すべては感動からはじまる」「野戦の指揮官・中坊公平—不良債権回収に挑む!」ほか多数

## 名もなき人々の奮闘が、戦後日本を作った

「プロジェクトX」は、毎週1200～1500万人の方々が見てくださった番組です。「子どもに見せたい番組」の4年連続1位に選ばれ、世界36の国や地域でも放映されました。本日は私がどんな思いを抱いてこの番組を立ち上げたのか、そして番組を通して出会った日本人の素顔とリーダーたちの生き様についてお話をさせていただきます。

昭和20年8月15日、どこまでも続く荒涼とした廃墟の中、科学・技術・文化、すべてが根絶やしにされた状況に日本は直面しました。その惨状は世界史でも類を見ないものだったといえます。もちろん疲弊しきったこの国において、未来を保証された人間や会社など1つたりともなかったはずです。そのゼロの地点から今日の豊かな日本を築いたのは誰だったのか？ それは、政治界のスターや国家的なリーダーではありません。それは、全国各地に生きて無数の人々、中小企業やサラリーマンだったのです。「自分たちの故郷を何としてでも蘇らせよう」、「ボロボロに傷ついた自分たちの会社を再建しよう」。そんな思いで必死の奮闘を続けてきた数千万の人々の努力のもとに、今日私たちが生きている日本はあるのです。

番組に登場した本田技研工業は、昭和21年に浜松で生まれた社員13人足らずの町工場でした。昭和27年、ホンダは総合オートバイメーカーとして東京に進出。しかし、その後日本を襲った大不況の波を受け、消滅の危機にさらされます。そうした中で彼らは「このまま座して死を待つよりも、自分たちの技術を世界の檣舞台で試してみよう」と、大胆な決意を固めます。選んだ舞台は、ヨーロッパの一流メーカーしか聞えないと言われたイギリスの名門レース。

「Made in JAPAN」の製品が「安かろう、悪かろう」という偏見の目で見られていた、昭和30年代のことです。「無理、無茶、無謀」と言われた彼らの挑戦。しかし、不屈の精神で

見事なエンジンを作り上げた彼らは、レースの1～5位を独占するという快挙を成し遂げたのです。こうしてホンダの戦後のストーリーが始まりました。同様に、すべての会社がゼロから自分たちの物語を紡ぎ始めました。彼らは自らの最もすぐれた能力、すなわち「もの作りの力」を確信し、未知の領域を果敢に切り拓き、挑戦者として生きることの大切さを我が身に刻みながら今日まで闘ってきたのです。

## 番組にかける情熱、そして波乱含みのスタート

ところが1990年代初頭、日本に暗い時代が到来します。バブルの崩壊です。技術力がない、営業力がない、国際競争力がない、大胆さに欠ける……。この時ほど日本人が辛辣な言葉を投げかけられたことはありません。「プロジェクトX」はそんな時代の最中に始まった番組です。誇りを失い、苦境をしのいでいた日本人に向けて、戦後を生きた人々がいかなる思いを胸に闘ってきたのかを伝えたく。市井しせいを生きる彼らの仕事や人生に光を当てるような番組を、何としてでも作りたかったのです。

しかし、現実には甘くありませんでした。上層部の反応は、「そんな番組を一体誰が見るのか？」というもの。それというのも、TV番組は常に視聴率競争にさらされているからです。ゴールデンタイムの番組が存続するためには、最低でも700～800万人の視聴者が存在しなければなりません。そのため当時は、「有名人を出演させれば、視聴率が取れる」という常識がまかり通っていました。一方、「プロジェクトX」に登場するのは、1人の技術者や営業マン、あるいは中小企業の経営者です。「無名の人々にメッセージを発することができるのか？」という懐疑的な反応を一身に受けました。

ようやく企画が通った後、私に与えられたのは6人の部下。この規模の番組に必要なスタッフのわずか3分の1です。さらに制作を進めるうちに、「プロジェクトX」は想



像以上に手間のかかる番組だということもわかりました。番組1本の制作期間は3ヶ月半から半年。常時5～6本を平行して進行するのですが、その間、人を探し訪ね、話を聴き、資料を集めるため全国を旅して歩くという過酷な日々が始まりました。そこで私たちが出会ったのは、技術のため、会社のため、そして何より夢のために、困難に立ち向かっていった人々の姿でした。名を成さず、富を築かず、地位を築かず、必死懸命に生きた彼らの素顔に、我々スタッフは背筋の伸びるような思いを抱いたものです。そして「どんなに苦しくても、絶対に番組をやり抜こう」と気持ちを新たに作る毎日でした。

## 番組の守り神・中島みゆきのテーマ曲

私たちは番組作りの途上で実に様々な困難に見舞われましたが、同時に、この番組を支え守ってくれる仲間とも出会えました。例えば中島みゆきさん。彼女はデビューから30年以上、一貫して市井しせいを生きる人々と同じ目線で歌い続けてきた稀有な歌手です。乾き切った心を潤してくれる声、「またがんばろう」と思わせてくれる歌の数々。私自身、いつも彼女の歌に慰められ励まされた人間の1人です。ですから、「テーマ曲を歌うのは彼女でなければ」と、熱烈にオファーをしたのです。彼女がこの番組のために書き下ろした「地上の星」は、番組に登場するサラリーマンたちをギリシャ神話の神々に昇華して書き上げた名曲です。そして、174週

連続チャートインという戦後最高のヒットを記録しました。

## 夢に対する執念を持って

こうして私たちは、ようやく番組スタートに漕ぎ着けました。第2回目の放送にあたる2000年4月4日、「窓際族が世界規格を作った/VHS・執念の逆転劇」と題して、日本人が初めて生み出した世界標準規格「VHS」の成功秘話を紹介しました。そして驚いたことに、放送が終わるや否やNHKの電話が鳴り始め、5000本を超える反響があったのです。窓際技術者が十数年をかけて挑んだ執念の闘いを見た人々は、「自分たちの夢を諦めてはいけなかった」と語ってくれました。私は、「執念」とは自分の夢を決して諦めない人たちに贈られる言葉なのだと思います。

ここで、プロジェクトの中核を成した日本ビクターの高野鎮雄氏が、会社の経営をする後輩に贈った言葉をご紹介します。

**権力やルールで指示をしても、本当に人が動いてくれるわけではない。権力によってではなく感動によって人を動かすのが、本当の経営者ではないのか。**

多くの反対に遭い、人や資金が集まらず、時代の風も思うように吹いてくれない……。

そんな逆境にある時、リーダーに求められる最高の条件とは何なのでしょう？ それは、夢と志を共にする部下たちに対し、彼らの魂が打ち震えるような感動のひとつときを与えられるかどうかということです。そして、人と人との本当の絆は逆境の中でこそ結ばれるということを、高野氏は伝えたかったのだと思います。

中年だけではなく、非常に多くの若者たちも番組に感想を寄せてくれました。名もなき人々の生き様を前にして、彼らは「登場者たちの顔がよかった」と、口々に話してくれました。若者たちもみな、一瞬一瞬をいかに輝いて生きるかを模索しているのです。

そして同時に、今を生きる我々ビジネスマンたちは、自分がどんな顔をして若者たちと向き合っているかを問われているのだと思います。

最後に、番組に込めたメッセージをお伝えし、講演の結びにしたいと思います。

**思いは、叶う。**

**努力する人間を、運命は裏切らない。**

**逆境の中でも、道は切り拓ける。**

**思いは、叶う。**

夢を大切に守り続けた日本人たち。私たちの血の中に流れている勇気と誇りを胸に、これからも前を向いて歩き続けていただきたいと思います。

### 「プロジェクトX ～挑戦者たち～」番組プロフィール

2000年3月28日～2005年12月28日まで、毎週火曜日の21時15分から計191本を放映。キャスターは国井雅比古氏、ナレーションは田口トモロヲ氏。番組の主題歌「地上の星」とエンディングテーマ曲「ヘッドライト・テールライト」はこの番組のために中島みゆきが書き下ろした曲で、異例のロングヒットとなった。

※講演では番組のVTRを交えながら、第2回「窓際族が世界規格を作った VHS・執念の逆転劇」(2000年4月4日放送)、第3回「友の死を越えて 青函トンネル・24年の大工事」(2000年4月11日放送)、第4回「ガンを探し出せ 完全国産・胃カメラ開発」(2000年4月18日放送)などのエピソードを語っていただいた。

## セミナー終了後の懇親会

セミナーに引き続き行われた懇親会は、多くの皆様にご参加いただき、励ましの言葉をいただいた。

まずは JCSSA 大塚裕司会長からの挨拶。来賓代表のスピーチは経済産業省 商務情報政策局 情報処理振興課長 鍛冶克彦氏と、日本ヒューレット・パッカード株式会社 代表取締役社長 社長執行役員 小田晋吾氏より、また乾杯の音頭は (社) コンピュータソフトウェア協会 会長 和田 成史氏より頂戴した。





## JCSSA新入社員セミナー

2007年4月17日文京シビック大ホールにおいて、当協会主催の恒例行事、新入社員セミナーが開催された。会場に集まった20社約702名の新入社員は、講演者の語る話を熱心に聞き入った。ここでは今回の講演内容を簡単にご紹介しよう。



「ここに集まった新入社員の皆さんは各社の期待を背負っていらっしゃいます。グローバル化時代、情報化社会の中で、社会人としての出発を迎えた皆さんは真の国際人となれるよう、これから各企業において、より良い成長をしていただきたいと思います」。今年の新入社員セミナーはJCSSA 金成副会長の挨拶から始まった。金成氏は「やりたいことは、やってみなさい」と自身が恩師にもらった言葉を紹介し、「皆さんも入社したときの気持ちや忘れず、勇気と責任を持って頑張ってください」と開会の挨拶を締めくくった。



**情報革命の担い手になる皆さんへ**  
**ソフトバンクモバイル株式会社**  
**取締役 執行役副社長 富田 克一氏**

「自分の健康は自分で管理する。それが社会人としての基本です」ソフトバンクモバイル株式会社 富田克一氏の講演は新入社員へビジネスマンとしての心得を伝える言葉から始まった。しかし、NECに入社以来、PC9801シリーズの開発に携わるなど、40年間という長きに渡り、IT業界を引っ張ってきた人物の言葉はその重みが違う。

続けて、富田氏は情報革命によって我々がどういう世の中に身を置いているのか、そして情報化社会によって世

の中の価値、価値観、メディアがどう変化してきたのかを解説した。「工業化社会は皆が同じものを同じように持つ世界でした。しかし、情報化社会は多様性の社会。今、情報革命によって情報の価値が上がり、様々なものが世界同時進行で、しかもものすごいスピードで進行しています。我々はそんな中に身を置いているということを感じなければなりません。しかし、実際のところは多くの人がこれらを実感できていないのです」。こう指摘した上で、富田氏は「変わる」「現場」という2つの言葉を上げた。「変わらないというのは最悪です。世の中の目まぐるしい変化を現場において体感し、意識を変えることが我々の業界には最も大切なのです」。

続いて、富田氏は自身の歩みを振り返りながら、そこで学んできたことについて語った。

まずは、大型コンピュータの開発に携わった時代。約3年間を掛けて1台の巨大なコンピュータ開発に何百人もの人間が携わった大プロジェクト。事業部長たった一人の「絶対できる」という信念で、皆が諦めかけていたプロジェクトが成功に導かれた。富田氏はこの事業に携わり、信念を持つことの重要性を学んだという。

次にパソコン開発に携わった時代。それまで、大型コンピュータの開発に携わっていた富田氏はここで時間軸に対する考え方が「早く」そして「速い」ことに衝撃を受けたという。「現在はスピ

ード競争の時代。明日の100点より今日の60点の方がよっぽど価値のある時代なのです」と富田氏はスピードの重要性を強調した。また、日本の工業製品が世界一になり得た理由は二律背反の両立化(高品質、低価格という本来両立し得ないものを両立させたこと)にあったと、この時代を振り返った。

そして、マーケティングに携わった時代。それまで開発の現場に携わってきた富田氏は他の職種に移ることに、はじめは違和感を覚えたという。「しかし、変化はチャンスです。自分の能力は自分では分かっていないもの。ある環境に身を置くと、今まで知らなかった自分の能力を発見することができるのです。皆さんも会社の中で変わるチャンスがあれば、積極的に手を挙げてください」と富田氏はチャレンジすることの大切さを説いた。「私たちは常に時間と闘っています。情報化社会の中で最も大切なものは『時間』であるといってもよいでしょう。そして、この『時間』は誰にも公平に与えられる資源です。皆さんもそのことは忘れないで、チャレンジし続けてください」。この「時間は誰にも公平に与えられる資源」と



いう富田氏の言葉は、特に新入社員の心に響いたようだ。講演後のアンケートの中でも、特に印象に残った言葉として、たいへん多くの反響があった。

次に、マネージメント時代の経験から、自分の位置を確認する重要性と人を使うことの大切さを語った。「私たちは自分が会社の中で何を期待され、何をすべきか、そして将来的に何をすべきか、常に意識する必要があります。また、自分一人でできることは限られます。ですから誰が何をできるか見極め、何かあったときには協力を仰ぐことが必要です」。

続いて富田氏自身が、1年前にソフトバンクモバイルへ異動した際、孫正義氏とやりとりしたエピソードを紹介し、人との出会いの大切さを語った。

最後に富田氏は、仕事を楽しむためのアドバイスで講演を締めくくった。

「我々は起きている時間の3分の2は仕事に費やします。ですから、仕事は楽しくなければならぬ。そのためには仕事の中に目標を見つけることが大切です。目標もただ掲げるだけでなく、目標に向かって努力し、達成できなかつたら反省することが大切です」。

パソコンの黎明・成長期にその事業に携わり、すさまじい勢いで変化・成長したIT市場に直面してきた偉大な先輩のアドバイスは、新入社員の進むべき道標として大いに役に立ったであろう。

## コミュニケーションの重要性

株式会社パンネーションズコンサルティンググループ

代表取締役 安田 正氏

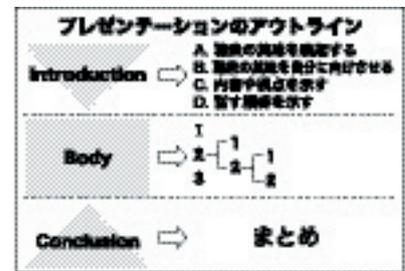
「コミュニケーションは実は大きなコスト財源です」。語学とコミュニケーションの教育を専門的に手掛ける、株式会社パンネーションズコンサルティ

ンググループ 安田正氏の講演は、ここ5年で最重要なビジネスコンピタンスとなった、コミュニケーションの重要性を解説することから始まった。「現在の日本はグローバル化が進んだ影響もあり、交渉能力・説得力を含む高いコミュニケーション能力が、必要とされるようになってきました。しかし、実際のところ日本の教育においては、国際社会で求められるコミュニケーションスキルを身に付ける機会がありません」。

まず、安田氏は報・連・相(報告・連絡・相談)の悪い例を読み上げ、それがどうすれば分かりやすくなるのか、聴講者に隣の席同士で実践させ、数名の代表者に改善例を発表させた。安田氏は改善例の発表を聞いた上で、報・連・相がなぜうまくゆかないのかを説明した。「日本人にとって、報・連・相は難しいものなのです。といっても、日本人は決して論理的でないということではありません。そもそも日本のコミュニケーション環境は欧米と違い、『ハイコンテキスト文化』の上に成り立っています。『ハイコンテキスト文化』では、聞き取る側の文脈理解力が非常に高い。しかし、その分言語依存度が低くなることで、ビジネスの現場や特に国際社会においては、コミュニケーションのミスが起こりやすくなるのです」。安田氏の解説は、新社員にとってより実感のある内容に落とし込まれる。「確かに新入社員の皆さんも何年か会社にいれば、特別なコミュニケーションのスキルを身に付ける必要もなく、社内の人



間とコミュニケーションを取ることができるようになるかもしれません。しかし、皆さんはその何年かを待たずに、上司やお客様に評価をされてしまう立場にあります。特に皆さんはこれから新しくそして難しい技術について、お客様に説明したり、上司に相談しなければならない局面に多々出会うはずで、つまり相手の理解力が決して高くない状態でコミュニケーションを取らなければならないのです」。



さらに安田氏はコミュニケーションの取り方をまとめたDVDを流した上で、よりよいプレゼンテーションのアウトラインについて解説した。「この中で皆さんに特に実践してもらいたいのは『Introduction』の『D.話す順番を示す』です。人は予告もなく話をされることに不安を感じるものです。最初に話す内容を予告しておけば、聞き手も安心してあなたの話に耳を傾けてくれるのです」。安田氏はこのように述べた上で、今日から実践できるより良いコミュニケーションの取り方を紹介した。

「例えば相手に報告する際、『報告が2点あります。『時間』と『費用』についてです』などと伝えたい内容のまとめをまず予告してください。それから詳細を説明する習慣をつけるだけで、皆さんに対する上司やお客様の評価は格段に上がります」。

安田氏の講演は、今後IT業界で活躍する新社員にとって、コミュニケーションの在り方や進め方を学ぶ非常に有意義なものとなったであろう。



## 金融商品取引法と これからの企業活動

～実施基準公開後の最新動向と実務への適用ポイント～

仰星監査法人 代表社員 公認会計士 南 成人氏

「日本版SOX法」とも呼ばれている「金融商品取引法による内部統制強化」が、2009年3月決算期から施行される予定である。これにより、企業は会計監査制度の充実と内部統制強化が求められるわけだが、特にITへの対応がより重視されることとなる。

そこでJCSSAでは2007年5月17日、仰星監査法人代表社員 公認会計士の南成人氏をお招きし、システム関連会社向けに今後どのような構築や実務適用が必要なのかお話をいただいた。

### IT統制

IT統制は、一般的に以下の3つに分類される(図1参照)。

- 1) 全社的なIT統制(ITCLC)
- 2) IT全般統制(ITGC)
- 3) IT業務処理統制(ITAC)

1) は連結グループ全体でのIT統制。戦略を立て、どのような組織で統制していくのかなどを決定するコントロールである。

2) は業務プロセスにおいてアプリ

ケーション・システムを稼働させるためのIT基盤単位でのIT統制。例えば、自社開発システムをシステム部が管理し、市販のパッケージソフトを経理部が管理している場合、評価単位は2つとなる。

3) は個々のアプリケーション単位でのIT統制。例えば、マスタ登録してある内容と異なる、間違ったデータを入力しようとした場合にエラーで弾くというような、ミスを防ぐ手立てをアプリケーションに組み込むなどのリスクコントロールだ。

### 実施基準で求められるITへの対応

2007年2月15日に公表された実施基準において、ITへの対応は重要な位置づけとして外出しされ、「IT環境への対応」と「ITの利用および統制」の2部構成となっている。

我々は、オリジナルのIT環境調査書テンプレートを作りIT環境への対応をしている。また、ITの統制においては統制目標を設定して、それを達成するために、IT統制活動を構築しなければ

ならない。その構築が「IT全般統制」と「IT業務処理統制」なのである。

### 真の業務プロセス改革

先行するアメリカでは、内部統制の評価を裏付けるものとして、一般的に以下3種類の文書を「3点セット」と呼んでいる。

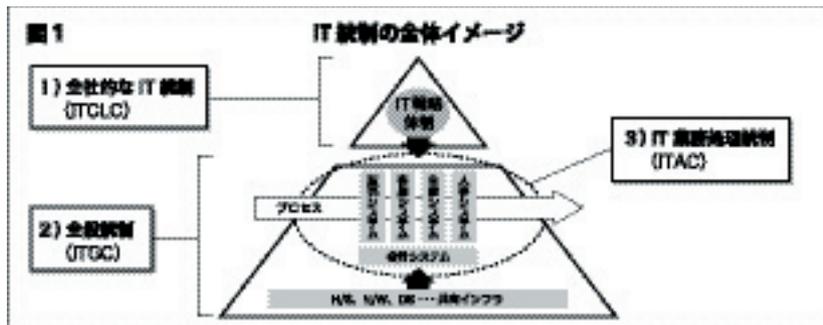
- 1) RCM(リスク・コントロール・マトリックス)
- 2) 業務記述書
- 3) 業務フローチャート

アメリカでは1)を中心に、補助資料として2)と3)を作成している。しかし我々は、1)をメインに作成することは業務効率へブレーキをかけ過ぎてしまうのではないかと懸念している。リスクコントロールだけ先行して行うと、業務効率を阻害することになりかねない。ではどうするべきか? 3)のフローチャートから入るべきなのである。一度フローチャートを作っておけば、たとえ初回版が不完全だとしても、毎年見直すのだから徐々に無駄やリスクが削られていき、成熟度が高まっていく。必然的に業務改善につながるのである。さらにIT化することで評価サンプル数も少なくなり、評価の負荷も落ちていく。

今後、内部統制の必要に迫られる企業のために、我々はオリジナルの業務改善用フローチャートをベースにした内部統制の可視化を支援していく。

図1

IT統制の全体イメージ



■基幹業務システムとの連携で、新たな価値を生み出す新世代デジタル複合機の可能性

# ドキュメントと業務システムの連携で 加速する業務革新

株式会社リコー 販売事業本部  
SMCソリューション技術センター 室長 平岡 昭夫氏

社内のあらゆる文書を管理するドキュメント管理ソリューションが、今注目されている。この背景には社内情報の漏えい防止とともに、e-文書法による各種書類の電子データ保存、またJ-SOX法施行へ向けた企業内コンプライアンス対策の必要性が出てきたことなどが上げられる。JCSSAでは株式会社リコー 販売事業本部 SMC ソリューション技術センター 室長 平岡 昭夫氏に、業務システムとの連携により、新たな価値を生み出す情報端末となった、新世代デジタル複合機の可能性についてお話いただいた。

## 紙と基幹システム情報の連携・融合

現在、企業内では基幹システムをはじめワークフローやグループウェアまであらゆる電子システムが活用されている。しかし実際のところ、外部（顧客）との接点では「紙」の文書が多く発生する。また、パソコンの導入が進んでいない現場がいまだに多数存在することも事実である。

現在の複合機(MFP: Multi Function Printer) はアナログからデジタルへ、モノクロからカラーへ、そして複合化、ネットワーク化などいくつかの革新を遂げ、今新たに紙と電子の融合性を強化する変革を実現した。システム連携を実現し、インテリジェント化したMFPを使うと、例えば支社で作成した

紙の契約書にバーコードを入れ、MFPでスキャンすることで、一気に本部の基幹システムへ紐付けることができる。これにより、文書管理体制の検索性・利便性が向上することはもちろん、SOX法対策や企業のコスト大幅削減に貢献することが可能だ。

## MFPの最新技術

MFPの基盤技術 ESA (Embedded Software Architecture) は、外部アプリケーションをMFP上で動作させるリコー独自のプラットフォームである。UNIXベースの独自OS上にこのJAVAのプラットフォームが搭載されることで、MFPはパソコンと同じ発想で機能を追加してゆける(つまりは何でもできる)。

MFP上のJAVA VMエンジンを利用した開発環境「DeviceSDK」を使って開発を行えば、スキャナーフレームワーク、FAXフレームワーク、印刷サーバフレームワーク、またファイルフォーマット変換(PDF)、ネットワークプロトコル、WebDAVクライアント、画像操作/処理、認証など、様々な部品やフレームワークを組み合わせ、顧客のニーズに応じた個別のシステムを提供することができる。

## システムベンダーとの協業推進

リコーでは以下大きく3つの分野で、

アプリケーションを開発、提供している。

- 「大手企業様向け個別システム開発」
- 「システムベンダー様との協業推進」
- 「MFP拡張機能オプション提供」

システムベンダー様との協業推進では、大手企業様向けに業界トップシェアのシェアソフトとの連携、また中小企業様向けにはリコー販社の取引商品と連携を図っている。特にこの分野においては、JCSSA会員企業様のご協力をいただきたい。また、MFPの拡張機能はMFPソリューションとして、リコーブランドで開発・販売している。これは連携ツールとして即活用できるものだが、実際にESAでどんなことができるのか紹介する役割も兼ねているので、一度ご参照いただきたい。

講演では、リコーの新しいソリューションブランド「Operius(オペリウス)」の紹介があった。また、株式会社大塚商会の文書管理システム「Visual Finder」とMFPで実現する情報共有のデモンストレーションをはじめ、過去のシステムベンダー協業事例が多数紹介された。

**業務システムとMFP**

- ◆ワークフローの改善  
紙文書の電子化により効率
- ◆業務効率向上  
電子化された文書もDBで共
- ◆セキュリティシステム  
業務システムや情報ツール  
のセキュリティ
- ◆紙文書の電子化促進  
電子化された文書もDBで共

## 交流促進委員会

### ▼ 松下ネットワークオペレーションズ・ライブオフィス見学会のご案内

オフィスの情報セキュリティや内部統制への関心が高まっています。こうした気運を受け、交流促進の一環としてライブオフィス・セキュリティ見学会を開催することになりました。

見学先である松下ネットワークオペレーションズは、東京田町の自社オフィスを各種ネットワーク機器を組み合わせたトータルセキュリティソリューションオフィスとして公開されています。オフィス内をレベル別に分けてセキュリティ商品を紹介し、カタログだけでは伝わりにくいセキュリティを体感して理解できる、他にないサービスをされています。

今回は30名に限定して見学会を開催します。この見学を通じて、セキュリティを切り口にした内部統制対策のヒントを得ると同時に、相互のコラボレーションの機会としてもご活用ください。最新の機器やソフトを駆使したセキュリティに触れる貴重な機会です。ぜひ大勢の皆様のご参加を、お待ちしております。

- ◆ **日時:** 2007年7月24日(火) 第1班 15:00~17:00 第2班 13:00~15:00  
※先着30名様限定  
※お申し込み順に第1班から登録します。登録者が15名を超えた場合は、第2班とさせていただきます。
- ◆ **場所:** 松下ネットワークオペレーションズ株式会社  
港区芝4-8-2 松下電工田町ビル(JR田町駅より徒歩10分)  
※場所の詳細は下記URLよりご確認ください。  
[http://www.mno.co.jp/d/map/images/map\\_to.gif](http://www.mno.co.jp/d/map/images/map_to.gif)
- ◆ **お申込み:** 「会社名、役職、氏名」をご記入の上、JCSSA事務局までメールにてお申し込みください。  
メールアドレスはこちら [jimu@jcssa.or.jp](mailto:jimu@jcssa.or.jp)

ライブオフィスの詳細は下記URLよりご覧ください。  
<http://www.mno.co.jp/new/mnonews0602.pdf>

### ◎ 「ITトレンドフォーラム」のご案内

社内のあらゆるドキュメントを管理するドキュメント管理ソリューションが注目されています。これは社内情報の漏えい防止とともに、e-文書法による各種書類の電子データ保存が認められたこと、さらにJ-SOX法施行へ向けた企業内コンプライアンス対策の必要性が出てきたことによります。協会会員の皆様にとって、今後、ドキュメント管理ソリューションとITソリューションを融合させた提案活動は、事業展開の上で不可欠なことのひとつと考えます。

今後本格的なドキュメント管理システムを導入する企業に対し、どのような機能を付加して提供すべきでしょうか？ 次回ITトレンドフォーラムでは、ドキュメント管理のあるべき姿やITソリューションとの融合事例について、複合機開発・販売企業数社を招き実演を交えて紹介いたします。

テーマ : **ドキュメント管理ソリューションと IT ソリューションの融合**

開催日 : **2007年11月15日(木) 15:00~18:30**

定員 : **120名**

プレゼンテーション企業 : **複合機の開発・販売企業 数社を予定**

懇親会 : **フォーラム終了後、開発会社と会員各社の懇親会を開催**

参加費用 : **フォーラム参加費用は無料、懇親会参加費用は有料(予定)**

#### ITトレンドフォーラムとは？

IT(新技術)のトレンドおよびITをベースとしたビジネスソリューションを学び、開発会社との交流を図ることで、会員各社の事業化につなげるとともに、ビジネスチャンスを広げるための勉強会&交流会です。

# ソフトウェア流通調査委員会

## ソフトウェアの流通に関する調査研究

JCSSA ソフトウェア流通調査委員会 委員長 本多 豊

本委員会では、平成18年度経済産業省委託事業であるソフトウェア品質等評価基準測定・知識基盤システム等構築(先進的ソフトウェアの時空間情報に関する調査研究)を受けて「ソフトウェアの流通に関する調査研究」の調査報告書を作成。調査研究では、ソフトウェアメーカーおよび卸から出荷されるソフトウェアの出荷金額、出荷数量をソフトウェア分類、流通経路、販売形態別に集計し、流通構造の特徴などを分析しました。

本調査研究では、企業のコンプライアンスに対する意識強化に伴い、特に外資系の情報収集に苦慮しています。卸からの出荷量が把握できたことは大きな成果です。

以下が「調査・研究報告書」の概要です。

### ◆ 調査内容

#### 1. ソフトウェアの流通経路別出荷量調査

- ソフトウェアメーカーから出荷されるソフトウェアの出荷金額、出荷数量をソフトウェア分類、流通経路、販売形態別に集計し、流通構造の特徴を比較分析する。
- 卸から出荷されるソフトウェアの出荷金額、出荷数量をソフトウェア分類、流通経路別に集計し、流通構造の特徴を比較分析する。

#### 2. 流通経路で対象となるソフトウェアの評価基準、選定条件、付帯サービスなどの調査

- ソフトウェアメーカーが実施しているソフトウェアの品質の検証法、評価方法、テスト技法、テスト支援ツールなどの導入、活用などソフトウェア保証の実態
- 卸、販売会社、量販店が実施しているソフトウェアの選定条件の実態
- ソフトウェアメーカー、販売会社が提供しているカスタマイズサービス

### ◆ ソフトウェアの流通経路別出荷量調査

#### <アンケート数>

発送数	1373件
回収数	191件
有効回答数	141件
OS・汎用アプリケーション	78件
業種・業務ソフトウェア	82件

#### <出荷金額回答結果>

ソフトウェア総出荷金額	366,720百万円
OS・汎用アプリケーション	203,900百万円
業種・業務ソフトウェア	162,820百万円

### ◆ 卸調査結果 (ソフトウェアの卸業4社の回答となります。)

販売会社:209,446百万円	35,812千本		
量販店: 60,319百万円	9,338千本	合計 279,258百万円	46,175千本
その他: 9,493百万円	1,025千本	本数当たりの平均単価	6,040円

### ◆ 品質評価基準の調査結果

#### 1. ソフトウェアの品質管理基準

ソフトウェア開発・保守段階でのソフトウェアの品質を確保するための取り組みの基準となります。

OS・汎用アプリケーション:71社 業種・業務ソフトウェア:74社

本調査では全体的に、業種・業務の方が品質確保のための取り組み度合いが高い回答結果となっています。

#### 2. 顧客の声を吸上げる仕組み

ソフトウェア別のユーザー会の設置を行っていませんが、OS・汎用アプリケーションでは83%、業種・業務では70%と非常に大きな回答となっています。

<付帯サービス調査結果> (業種・業務ソフトウェアについてメーカー調査を行い、81社から回答がありました)

出荷金額	162,820百万円
カスタマイズ料金	43,497百万円
保守料金	22,412百万円

回答では、販売会社はソフトウェアメーカーからの仕入れに際して、稼働できるOS、データ互換性などのソフトウェア自体の特性と並んで、付帯サービスの一つである保守バージョンアップの可否を重要視しています。

詳細は調査報告書をご参照ください。



新会員のご紹介

# NEW MEMBERS

2007年6月現在

①所在地 ②会員代表者 ③設立 ④資本金 ⑤従業員数 ⑥入会年月

<h2>01</h2>	<p>■ 正会員</p> <h3>株式会社オフィスエム</h3>	<a href="http://www.officem.jp/">http://www.officem.jp/</a>
-------------	----------------------------------	-------------------------------------------------------------

- ①〒105-6016 東京都港区虎ノ門4-3-1 城山トラストタワー16階
- ②代表取締役 田上 睦深
- ③1995年11月
- ④1000万円
- ⑤10名
- ⑥2007(平成19)年4月

全国を拠点として、20,600名のスタッフがビジネスをサポートし、情報処理、デザイン、オフィスワークなど各種ナレッジワーク・知的作業を請負うコンサルティングサービスを行っております。具体的にはWEBデザイン、開発、コンテンツ開発、DTPデザイン、翻訳、テクニカルライティング、データ入力、資料作成、市場調査、経理代行、マーケティング営業支援など、専門知識のあるスタッフが、多種多様な業務に対応いたします。さらにビジネスコンビニも展開しております。実績は下記URLにてご覧ください。

<http://www.atcon.jp>

また、ワンストップのIT版アウトソーシング企業として、フットワークよく対応しております。最近話題のセカンドライフにも進出しました。



<h2>02</h2>	<p>■ 正会員</p> <h3>アロシステム株式会社</h3>	<a href="http://www.pc-koubou.jp/">http://www.pc-koubou.jp/</a>
-------------	----------------------------------	-----------------------------------------------------------------

- ①〒556-0005 大阪府大阪市浪速区日本橋4丁目16番1号
- ②代表取締役 大野三規
- ③1990年9月
- ④7億5000万円
- ⑤546名
- ⑥2007(平成19)年5月

当社は、「パソコン工房」ブランドでPCハードウェア本体の製造・販売、およびPCパーツの小売事業を全国的に展開しており、1990年の創業以来着実な成長を遂げてまいりました。2006年12月現在、関西地区を中心に全国89店舗の販売店・小売店を運営、「Faith Internet Shop」や「TWO TOP」など、業界屈指のパーツショップを同時に展開しております。

当社では、大手パソコンメーカーでは対応できない安価かつハイスペックのオリジナルパソコンをお客様に提供させていただくとともに、パソコンに関するご相談であれば、すべて解決するような場を店舗およびサイト上で提供させていただいております。

aro-system



TWO TOP

faith

<h2>03</h2>	<p>■ 正会員</p> <h3>株式会社インターリンク</h3>	<a href="http://www.interlink.or.jp/">http://www.interlink.or.jp/</a>
-------------	-----------------------------------	-----------------------------------------------------------------------

- ①〒170-6035 東京都豊島区東池袋3-1-1 サンシャイン60 35階
- ②代表取締役 横山 正
- ③1992年4月
- ④2億2610万円
- ⑤24名
- ⑥2007(平成19)年5月

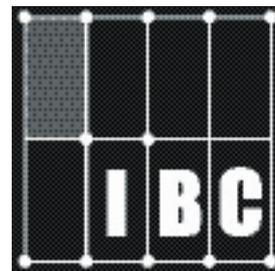
インターネットプロバイダー「インターリンク」の各事業についてご紹介いたします。①インターネット上級者向けに固定IP 接続サービスを提供しています。②ICANNより国内8社目のレジストラとして認定を受けドメイン取得サービスを提供しています。③レンタルサーバー、ホームページ、メールサービスを提供しています。④携帯着メロサイト「タダっちゃ」、遺言メール送信サイト「走れメロス」など、ちょっと役立つサイトを運営しています。また社会貢献活動として、3D仮想現実世界セカンドライフ「hachikoku yamaアイランド」において、NPOを支援する活動も行っています。



<h2>04</h2>	<p>■ 正会員</p> <h3>アイビーシー株式会社</h3>	<a href="http://www.abc21.co.jp/">http://www.abc21.co.jp/</a>
-------------	----------------------------------	---------------------------------------------------------------

- ①〒104-0033 東京都中央区新川1-25-2 新川STビル3階
- ②代表取締役 加藤 裕之
- ③2002年10月
- ④7000万円
- ⑤24名
- ⑥2007(平成19)年6月

ネットワークシステムの安定稼働を促進するためのデータ計測・蓄積・分析を可能とする、アプライアンス経過監視装置「BTmonitor」の自社開発・販売・サポートを行っております。また、BTmonitorで収集したデータを解析し、問題箇所を発見、対処方法を報告するサービスを提供しています。これらサービスを通して、マルチベンダーかつブラックボックス化したネットワークシステムの可視化を実現し、効率的なシステム運用や効果的な投資を実現するお手伝いをさせていただいております。さらには経験豊富な技術者による企業のネットワーク設計・構築・運用も行っております。



## JCSSAよりお知らせ

平素は、当協会の運営につきまして多大なるご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

6月12日（火）に帝国ホテルにて、恒例のサマーセミナーを開催いたしました。次回は、2008年1月21日（月）に新春特別セミナーと賀詞交歓会を開催の予定です。

またこの度、協会幹部による「米国エグゼクティブツアー」を開催いたします。日程は2007年10月15日（月）～20日（土）の6日間です。参加をご希望される方は、お早めに協会までお問い合わせください。

各委員会では、企画策定にご協力いただける委員を募集中です。ご希望の方は事務局にお申し込みください。

JCSSAでは会員の皆様にとって意義ある活動を続けてまいりますので、協会へのご意見、要望などをお寄せいただきたいと思います。

ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-9-4 鳴原ビル2F  
電話：03-5802-3198 FAX：03-5802-0743  
URL：www.jcssa.or.jp E-mail：jimu@jcssa.or.jp

